

タレントの亀山忍さんら有名人に増えている 腎臓がん早期発見と治療の進歩で根治可能

プロ野球・元阪神タイガースの亀山つとむさんの双子の弟で、タレントの亀山忍さんが8月、腎臓がんで亡くなりました。56歳でした。腎臓がんといえば、作家の百田尚樹さんやロックバンド「ハウンドドッグ」の大友康平さんも手術を受けています。最近、腎臓がんの人が増えています。どういう症状があり、何に気を付ければいいのか。

42歳の男性会社員Aさんは、健康診断で炎症反応（CRP）が少し高く、腹部超音波検査で右の腎臓に小さい影があるといわれました。総合病院の内科を受診し、腹部造影CT検査で右腎臓に3センチ大の腫瘍が見つかりました。泌尿器科で精査の結果、初期の腎臓がんと診断されました。ロボット支援下手術で腎部分切除術を受け、腎臓の機能を温存し、根治手術ができました。

腎臓は胃や腸の後ろにある後腹膜という場所に左右1つずつある握りこぶしよりもやや大きい臓器です。血液を濾過（ろか）し、尿として排泄（はいせつ）しています。血圧の調整に加え、血液や骨をつくることにも関与しています。

この腎臓の細胞が、がん化したものが腎臓がんです。日本では年間3万人強が腎臓がん罹患（りかん）し、1万人弱が亡くなっています。男性は女性の2倍で、年齢とともに発症が増え70代で最も多くなっています。近年、腎臓がんと診断される人は増加していますが、幸い早期発見と治療の進歩で亡くなる方は減少しています。

■肥満、喫煙、高血圧、赤身の過剰摂取でリスク上昇

腎臓がんのリスクを上げる要因に肥満や喫煙、高血圧に加え、過剰な赤身肉の摂取があります。1割弱は遺伝も関係しますが、塩分摂取を少なくし、食生活を改善することで腎臓がんの発症は抑えられます。

発見のきっかけについて昔は、おなかのしこり、腹痛、血尿といわれていました。しかし、こうした症状は進行した腎臓がんの特徴的で、今では6割の人が検診や他の病気の検査中に偶然発見されています。このような無症状で発見された多くの腫瘍は小さく（小径腎腫瘍）、がんでも悪性度は低く、予後が良いといわれています。

無症状で偶然発見された小径腎腫瘍の中には良性腫瘍もあり、専門の泌尿器科医の診断を受けることをお勧めします。

腎臓がんの特異的ながんマーカーはありません。ただ、CRP など炎症反応の上昇や肝機能の異常が見られることがあります。CRP は再発や予後とも関係し、術後のフォローでは画像検査に加え、これらの血液検査もします。

腎臓がんの治療は原則、手術による腫瘍切除です。近年、腹腔（ふくくう）鏡手術が多くなっており、最近はロボット支援手術も増えています。とくに小径の腎臓がんでは、ロボット支援手術などで腎臓を温存する部分切除が行われるようになりました。この手術で腎臓を温存しても再発リスクは変わらず、むしろ予後は良いようです。

手術ができない、したくない場合でも早期発見で腫瘍が小さいと凍結療法やラジオ波焼灼（しょうしゃく）術などのさまざまな治療の選択肢があります。

残念ながら手術で完全に腎臓がんが切除できても 3 人に 1 人は再発します。まれに診断時から転移がある場合もあります。最近ではこのような患者さんの予後も、免疫チェックポイント阻害薬が導入され、非常に良くなりました。